
騎士になる？

よもぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
騎士になる？

【Nコード】
N9458W

【作者名】
よもぎ

【あらすじ】
妹の声を治すために剣術大会に出る主人公。賞金目当てのはずが、なぜか騎士になることに。男装しての騎士ライフに、何故か構ってくるお腹真っ黒な団長。主人公は妹の声を治せるのか！！そして、自分の幸せを見つけることができるのか！！

プロローグ（前書き）

性懲りもなく連載開始。すみません・・・。

プロローグ

「いってきます」

「・・・ああ」

普段と一ミリも変わらない顔をしているくせに、きっと私たちの事が心配で心配でしかたないであろう養い親に、少し罪悪感を覚えよう。

「剣術大会で上位に入っても、騎士は辞退してくるから。ソフィをお医者様に見せたら帰ってくるから」

「・・・ああ」

私は知っている。この養い親が、私たちが王都に行くのが心配すぎて、王都の知り合いに片っ端から手紙を送ったことを。ついでに、旅の支度と称して、大量の護身用武器を買いそろえたことを。

「ハヤテに乗って行くから、ソフィの負担も少ないわ」

「・・・ああ」

妹のソフィも、困ったように養い親を見つめている。

「街道を進むから盗賊も少ないし、なによりそこらのごろつきに私が負けると思う？」

「・・・いや」

漆黒の毛並みが美しい愛馬の背から、次々と荷を落としながら私は言う。

「だから、この無駄な食料に、物騒な武器に、なにこれ！！小型の大砲までくくりつけたの！！」

どこの遠方の戦地に向かうんだ、私たちは！！

「王都に行くだけだから。戦地じゃないから。って、外した荷をくくりつけるな！！」

手をはたこうとするが、相手は自分に武を教えた人間。いなされ、逆に手をひねりあげられそうになり、それをまたいなすという無限ループ。

「ええい！！いい加減にしろ！！この鉄仮面過保護オヤジ！！」

罪悪感を少しでも覚えた数瞬前の自分はもういない。本格的に組み手に入りやがった養い親相手に、マジで殺意を覚えそうだ。

結局、私たちの出立は、次の日の明朝まで持ち越されたのだった。

プロローグ（後書き）

ラブコメ目指しています。ちょっぴりシリアスも混ぜる予定・・・。
あくまでも予定です。

1 (前書き)

一応2話目・・・。

『セシル・キリエ　16歳　ナトレ村出身』

受付に書いた出身地を見て、受付の騎士が驚いたように目を開く。

「坊主、ナトレの出身か。遠くから来たな」

「はい。やっぱり、出場される方は王都周辺の方ばかりですか？」

「そうだな。坊主みたいなのもいなくはないが、数は少ないな」

それから2、3言会話をして、受付を離れる。

「お前、ホントに大会にでるのか？」

受付を終え、外に出るとあきれた表情で立つ中年の男性が一人。年相応に刻まれたしわと、日に焼けた顔は厳つく、ぱっとみその辺のごろつきよりも凶悪な顔をしている。体格も、180？ほどあり、服越しに分かるほど筋肉がある。堅そうな赤毛と、焦げ茶の瞳はこの国に多い色彩で、手に斧でも持っていたら盗賊の頭と行った風貌だ。

「はい。そのために王都に来たんですから」

しれっという私に、彼は顔を顰める。

「俺は、騎士にするためにお前を助けたんじゃないぜ」

「騎士になるためではありませんよ」

彼の身に纏う衣が白衣でなかったら、今の自分はいない。

そう、彼は医者なのだ。しかも凄腕の。

「目当ては賞金の方です。ソフィを医者に診せるんです」

「……まだ、声は戻らねえのか？」

「……ええ」

あの日、両親を失い、養い親と彼に命を救われた時から約10年。ソフィの声はどこかへってしまったままだ。

「そうか。すまねえな。お前の妹の声は、おそらく精神的なものだ。俺の専門外だからな、どうしてやることもできねえ」

「そんなこと。先生には命を助けていただいただけで、感謝してもしきれません!!」

「……先生はやめろって」

顔を盛大に顰めると、小さい子なら泣き出しそうなほど凶悪な顔になる。だがそれが、照れているのだと知っている身にとっては、笑ってしまうよりほかない。

「にしてもよ、若い嫁入り前の娘が、剣術で金稼ぐっていうのもどうかと思うぜ」

今度は自分が顔を顰める番だ。

「しかも性別を偽って、だ。見つかったら打ち首とはいかなくても、それなりの罰はあるぜ？」

先生、もとい、ダグランの言うことはもっともだ。

「でもダグランさん。受付では、ばっちり坊主って言われましたよ？」

「そりゃあ、そんななりしてりゃあな」

上から下まで眺めての一言に、ちょっと内心傷ついたのは秘密だ。

背の半ばまである髪はゆるく一つに編んである。本当は切ってしまおうと思ったのだが、ソフィに止められたのでやめた。身につけているものも、長袖のシャツにベストにズボン。ショートブーツに、腰の後ろでクロスするように刺した2本の棒だけ。平凡な顔立ちと、凹凸の少ない体では、どこからどうみても少年にしか見えないだろう。

「それに、私みたいな器量の悪い娘をもらってくれる酔狂な男はいませんよ」

「それ、本気で言ってるのか？」

若干険しい顔で言うダグランさんに、なんでもないことのように答える。

「だって、こんな灰被ったみたいな色合いの娘、お世辞にも器量がいいとは言えないでしょう？」

「・・・・・・」

顔立ちは平凡だが、自分の場合髪と目の色が悪い。

髪は、くすんだ灰色。瞳は、青みがかったただけ髪よりましだが、それでも灰色であることは変わらない。少しつり目なのも相まって、目つきが悪い。

まあ、最大の欠点は体にもあるのだけれど、それを彼に言ってみれば、顔に似合わず優しい彼の事だ。海よりも深く落ち込むに違いない。

「それに、私もソフィもお嫁に行ってしまったら、誰があの鉄面皮人間の世話をするんです？」

少し重たくなってしまった空気を変えたくて、冗談めかしに言えば、ダグランもそれに乗ってくれた。

「確かに。あれでお前らを引き取って言った時は、空から槍か大砲が降るかと思ったな。子どころか、嫁もいねえのに。まあ、人は見かけによらねえっていうか、まさかあいつがあんなに・・・」
「過保護だったとは」

言葉尻をとってやれば、にやりと笑う。

「そうだ。まさか、あんな手紙まで寄越しやがるとは思わなかったぜ」

どんな手紙なのか気になる。が、見たくもない気がするのは何故だろう。

若干引きつった自分の顔をみて何を思ったか、いつそうにやりと笑みを深くしてダグランさんがくるるときびすを返す。

「ああ、なんだったかな。紙がありすぎたからな、あんまり覚えてないが・・・『セシルは甘い物が好きで、苦い物と辛い物が嫌いだから食べさせるな。でも、野菜は嫌いな物でも健康のために食べさせる』だったかな。ほかに、『セシルはおなかが弱いからちゃん

と布団をかけて寝せろ』だったか？『夜更かしはさせるな。夜の街は危ないから外に出すな』ほかは・・・」

「わああああ。何書いてんだあの鉄仮面過保護オヤジ！！って、やめて。言わないで。なんの嫌がらせ、それ！！てか羞恥プレイ？やめて！！ダグランさん！！」

そのあと、とっくみあいの喧嘩になり、ダグランの奥さんとソフイにこっぴどく叱られるのはもう少し先の話である。

1 (後書き)

ちよっぴり主人公の過去に触れる。主人公、顔は中の上くらいです。背は156?くらい。細身で、まだ女の子らしい体つきにはなっていないです。

その理由とかも、追々……。

2 (前書き)

そんなこんなで2話目・・・。

受付を終えて数日後、まちにまった剣術大会の幕があがった。

開会式なるものがあると聞き、とりあえず足を運んでみたのだが・
・・。

むさい・・・。

右も左も、前も後ろも男・男・男の大群。トーナメント形式とはいえ、自分よりも年上であろう屈強な男たち（ごろつきまがいもある）を相手にすると思うと、気が滅入る。

まあ、3位以内に入れば賞金はもらえるので（騎士の入団資格ももれなくついてくるが）、なんとか3位に入ることができればいい。

そんなことを考えていると、どうやら会場の奥の壇上に国王自らが姿を現したらしい。群衆の歓声と拍手に目を向ければ、遠くの壇上に初老の男の姿を見つけた。

「我が国を、我が国民を守る、志高く、強く、気高き騎士を目指さんとする者たちが、こんなにも多く集まったことに、私は感動している」

あ、やっぱり皆さん騎士になるために来るのね。

「私は是非にでも、皆を騎士にしたい。が、しかし、国を守り、人を守る騎士たるものの、強靱な肉体と精神を必要とする・・・」

長くなりそうなので、聞き流させてもらう。そうすると手持ちぶさたなので、周囲の観察を再開しようと目を向ければ、一人の少年が飛び込んできた。

明るい栗色の髪に濃い緑の瞳。白い肌は滑らかで、ぱっとみ自分と同じ男装した少女かと思ふに似る。しかし、服から伸びる腕には剣を持ったための筋肉がついており、少年から青年へと移り変わっているのだと見て取れる。

貴族だろうか。騎士服が似合いそうな美形っぷりである。

「おい、見ろよ。あんなガキまで出るのかよ」

「はっ、すぐに負けちまうに決まってるあ」

なんて声がちらほら聞こえる。おそらく、この少年や自分に対してだろう。

聞こえているであろうに、少年は動じない。きりりと国王を見つめる視線は、本当に騎士を夢見ている純粋なもので、賞金目当ての自分には些か眩しい。

そろりと視線を外せば、いつのまにか壇上の国王が姿を消し、代わりに騎士服に身を包んだ青年がいた。

「おい、あれが騎士団の団長だよ」

「ああ？あんな優男が？」

「あんなやつが団長になれるんだ、こんな大会ちよろいもんだ」

周りのささやきにげんなりする。

ネコだって爪を隠せる。強そうに見えるやつが強いとは限らず、まして、弱そうに見えるやつが弱いとは限らない。相手の力量を見た目だけで判断するというだけで、底が知れるというものだ。

実際、壇上に立つ男は騎士というより文官のような顔立ちだった。

サラサラと風に靡く髪は、貴族に多い金髪。眼鏡の奥の瞳は澄んだ海の輝き。すっと通った鼻梁に、笑みの形の薄い唇。白い肌は外の光を知らないかのように透明で、剣を握るより筆を握るのが似合いそうな風貌だ。文句ないまでの美青年。纏うのが軍服なのが、かなり違和感がある。

「王宮騎士団の団長を務めております、レイ・グリンデルと申します」

おそらく、一生縁がないであろう美青年の自己紹介に、興味などあるはずがない。一応開会式に顔を出したのだから、もういいだろう。

開会式が終われば、すぐに大会が始まる。なんとしても、3位に入賞しなければ。

くるりときびすを返した背に、壇上から視線が注がれていたことなど、知るよしもなかった。

3 (前書き)

行き当たりばったりな小説です。あんまり設定とか気にしないでサラッと読んでください m (´ `) m

3

剣術大会は無事開幕した。

「セシル・キリエ。ラッシュ・フスト」

控え室で待っていると、係の者らしい騎士（おそらく下っ端）に名を呼ばれ、入り口へと向かう。

「はっ。あんなガキ、一瞬で負けちまうぜ」

「エントリー出来たのが不思議なくらいだ」

全部聞こえてるよ。

こそこそと聞こえる嘲りの言葉に、いちいち反応してられない。そんな彼らをたしなめることも、相手にすることもなく、騎士は待っていた。

「セシル・キリエです」

「ラッシュ・フストだ。ふん、俺の相手はガキか。楽勝だな」

「静かに。二人は、次の試合で対決していただきます。使われる武器を見せてください」

この大会は、剣術大会と呼ばれてはいるが、武術大会に近い。ようは力比べだ。使う武器は自分の一番得意としているもので良く、自らの拳でも良い。

「俺は、これだ」

彼が突き出したのは斧。片手で扱えるサイズの、少々小ぶりなものだ。

「では、これを刃の部分につけてください」

騎士が渡したのは、動物の皮らしき物だ。

一応、安全性を配慮して、刃物類は刃を覆う布をつけることになっている。剣に関しては、刃を潰した剣を借りるか、鞘の入ったまま戦うかを選ぶことが出来る。

「けっ。めんどくせえこった」

いかにもだるそうにそれを受け取り、斧の刃に当てる。どうみても付け方が雑で、さすがの騎士も若干顔を顰める。

こういう奴は、一回鼻っ柱へし折られればいい。

「僕の武器はこれです」

「……棒？」

注意をしようと口を開きかけた騎士に被せるように口を開けば、騎士もこちらを相手にするしかない。が、見せたものがなんなのか判断出来かねたらしい。今度は困惑の表情が浮かぶ。

「はい。そうです。棒です」

腰に差していた棒を抜き、目の前に掲げる。

漆黒の棒に、巻き付くように這う銀色の細工。それは、鱗を持つ長い龍を模してあり、棒の先端に顔を持つ。同じように黒の棒に龍の細工、先端に顔を持つものがもう一つ。計2本の棒が、自分の武器だ。

正確には、『棍』と言うのだが、この国の人間には馴染みが薄いだろう。養い親の母国のものらしいから。

「こうして一本に合わせて使います。布は必要でしょうか？」
「……いえ。結構です。では、会場へ……」

龍の顔のない方を合わせ、軽くひねれば一本になる。そうすると150?ほどになる。自分の背より少し短いくらいだ。

相手の男が勝利を確信したような笑みを浮かべた。

斧でぶった切ってやる……とか考えてるんでしょ、どうせ。

雑に布を巻いたのは、競技中にわざと外れさせるため。相手に怪我をさせても、布が外れたのだと言い訳するため。

見え見えの作戦にうんざりする。が、同時に笑いが浮かぶ。

こういう奴を負かすことほどおもしろいことはない。

にやりと歪む唇が見えぬよう、そつと顔を下に向ける。

傍目には、負けを確信して落ち込む哀れな少年に見えるよう。棍を握りしめ、騎士の後に続くのだった。

3 (後書き)

主人公、結構性格捻くれています・・・。ホントは優しい子、のはず
です。

4 (前書き)

主要人物が中々全員出ない (汗)

試合が始まって早々、思った通り相手の武器に巻いてあった布が外れた。予想通り過ぎて逆に笑える。

「へっ、俺の相手になるたあ運がねえな」

下卑た笑いに、ちよつと怯えた表情、を作ってやる。

と、ますます調子に乗ったのか、男は笑みを深くした。そして、審判の注意も聞かずこちらに突っ込んできて――――

「なっ!!」

「……悪いね」

おそらくすっぱり切れると思ったのだろう、金属同士のぶつかりあう、独特の甲高い音とともに受け止められた斧。

「これ、銀じゃなくて鋼はがねの細工なんです。こういうふうに、受け止められるように」

にっこり。

相手も馬鹿じゃない。いや、そのくらいの強さはある。呆然としたのは一瞬で、すぐに下がって距離を持つ。

「ちっ」

が、今度はこっちが攻める番だ。相手が下がるのに合わせてこちらも前に出る。

――
何度かの打ち合いのあと、大きく振りかぶった懐めがけて――

「もらったああああ」

「!!」

棍や槍のように、リーチの長い武器はどうしても懐にスキが出来る。腐っても騎士を目指す男。それを見逃すはずはない。

男の手斧が迫る。布のない斧では、怪我は避けられない。

観客が、息を吞んだ。その先に見る、血に濡れた少年の姿を想像して、顔を伏せるものもいた。

「・・・なんてね」

「!!」

軽く手首をひねり、結合部をゆるめる。簡単に2本に別れた棍の、一本で男の手首を叩き、もう一本は男の首に。

一瞬のできごとだった――。

へたりこむ男の首筋に棍を突きつけた私。その足下には、男の武器が転がっていた。

大会のルールでは、相手に降参を宣言させるか、戦闘不能にすれば勝ちである。ただし、殺すことは厳禁だ。

静寂――――。

観客も、審判でさえも、目の前の状況に頭がついていかない。

血が出そうなくらい唇を噛みしめている男に、向けるのはただ冷静な眼差し。

「降参、ですよね？」

「・・・こんなガキに!!！」

「ええ、ガキです。それが何か？」

棍の先端、龍の牙が男の首に刺さる。

はっ、と我に返った審判が、慌てて間に入る。

「勝者、セシル・キリエ」

「待ちやがれ、俺はまだ!!！」

「やめなさい。誰が見ても、君の完敗ですよ」

「!!！団長」

審判の判定に、抗議する男。突きつけられた棍のせいで動けないのに、口だけは達者で呆れる。いっそ昏倒させようかと思った時に、まさかの騎士団長登場。観客も含め、その場にいた全員が固まった。あ、私を除いて。

「相手の力量を計れなかった時点で、君の負けは決まっていました。それに、彼はわざとスキを見せたんです。それに乗り、なおかつ反撃を予測できなかった。君の完敗です。潔く負けを認めなさい。君は負けたんです」

こいつ、わざとだ。

何度も繰り返される『負け』の言葉。絶対にわざと繰り返している。

見た目優男の美青年のくせに、お腹は真っ黒らしい。美形だけに余計残念だ。

「君はすばらしい腕を持っているね。それに、珍しい武器を使っている。よければ君に武を教えた師の名前を聞かせてもらえないだろうか？」

いつのまにか、男の負けは決定事項になっていた。うなだれた男には目もくれず、腹黒騎士団長はこちらに向かっていた。

「いえ、そんなことはありません。師は、田舎のしがない武闘家です。団長様のお耳に入れるような者では・・・」

「騎士を目指す者を育てた者です。興味を持つのはいけないでしょうか？」

めんどくさい、こいつ。

いつのまにか目の前にいて、こちらを見下ろす（頭ひとつぶんくらいは高い）美貌に見つめられれば、頬が赤く、染まることもなく顔を顰めないようにするのに必死だ。美形は遠くから見つめるのが楽しいのであって、近くで見れば眩しい以外のなにものでもない。

正直に言えば、めんどくさくなったのだ。どうせ賞金をもらってはいさよなら。今後関わりをもつことなどないのだ。師の名前の一

つや二つ、言ったところでどうということはない。

「師の名は、ヤマト・キリエと申します」

「ヤマト・キリエですか。では君の・・・」

「養い親でもあります」

超がつくほど過保護な。

「そうですか。ああ、随分時間をとってしまいました。君も疲れたでしょう。次の試合まで休んでください。君には是非、騎士になってもらいたいですから」

あなたのせいで疲れたんですよ。

「もったいないお言葉、ありがとうございます。ご期待に添えるよう、精進いたします」

げんなりしながら礼をし、会場をさる団長を見送る――――。

「このケリは、必ずつける!!」

ケリはもうついてるんですけど？

去り際の男の言葉を、鼻で笑い、ようやく第1試合が終わったのだった――――。

4 (後書き)

鋼は、見た目銀っぽいけどめっちゃめっちゃ堅いという設定。なんとなく、銀では鉄の剣を受け止められなさそうという、作者の偏見によるものです……。あまり気にしないでください。お願いします……。

5 (前書き)

そろそろストックが・・・。

大会2日目。

なんだかんだで順調に勝ち抜き、この試合に勝てば次は決戦。2位は確実のものになる。

ここで勝って次負けよう。

3位を狙っていたのだが、正直めんどくさくなった。ここで負ければ、次は必ず勝たなければいけない。背水の陣より、確実な陣の方が好みだ。それに、今日はソフィアも見に来ている。ここは姉として格好の良いところを見せなければ!!

と、意気揚々と会場に来てみれば、相手は意外にもあのきらきら眩しい瞳の持ち主。

「アルバート・ディラン。セシル・キリエ」

「はい」

「・・・はい」

名前も貴族みたいだが、使う武器も剣とあっては貴族のボンボンにしか見えない。が、ここまで勝ち残っているのだから、運だけではないだろう。ふむ、厄介だ。

線の細い体と、騎士の持つような長剣。おそらく彼はスピード重視型。力で押すタイプではない。

そうなるに非常に厄介だ。なにせ、自分もスピード重視型だから。

より速く攻撃を繰り出した方の勝ちは目に見えている。

「構え!!」

ずっと自分の前で剣を構える彼。対して、二本の棍をつなぎ、一本の長い棍を構える私自分。

先手必勝。一瞬で終わらせる・・・。

一つ、息を吸う。瞳を閉じ、神経を研ぎ澄ませる。

「始め!!」

合図とともに地を蹴る。

「!!」

まばたきする一瞬で詰めた間合い。左上方から振り下ろした棍を、受け止めようと彼の剣が動く。

剣に受け止められる前に棍を引き、体を回転。その勢いを利用し、さらに体のバネで加速を増しながら今度は右下方から振り上げる。

————龍の牙が、相手ののどに食らいつく。

会場が、一気に静まりかえった。

「・・・・・・まいりました」

「・・・・・・!!勝者、セシル・キリエ」

その沈黙を破ったのは、彼の悔しそうな声。今にも歯ぎしりが聞こえそうな声で吐き出された降参の言葉。我に返った審判の声により、試合は終了した。

お互い武器を納め、一步引く。

あ、危なかった。

冷や汗が、今になって背を伝う。

まさか、最初の一撃に反応するとは……。

本当は初めの一手で決めるつもりだったのだ。それに反応し、剣を構えた彼の神経は素晴らしい。騎士になり、鍛錬を積み重ね、青年となった彼が相手だったら、勝てる気がしない。

お互いに礼をしよう。下げた視界の中に、きつく握りしめられた拳を見たら、たまらず口を開いてしまった。

「まさか、最初の一手を止められるとは思わなかったよ」

「!!」

「久々にいい試合が出来た。礼を言わせてくれないか？」

「こちらこそ。あなたの強さに完敗です。……また、手合わせしていただきたいです」

強く、揺るぎない決意。その眼差しに、思わず口元が緩む。

「ふふふっ。わ……僕でよければいつでも相手をしますよ」

「ありがとう。それまで、俺は誰にも負けません。だから、あなたも負けないでください」

訂正。そう言って笑う彼の顔は、貴族のボンボンではなく、武人そのものだ。

純粹に武の高みを目指す姿勢は、眩しくもあり、羨ましくもある。正直、自分にはまねできない。

晴れやかな気持ちで彼と手を握り、別れる。そこで、はっと気づく。

———って、もしかして、優勝しなきゃダメなの？

控え室に戻る道すがら、ようやく当初の目的から外れざるを得ない状況に思い当たり、呆然としてしまったのは、彼の知らぬ事であった。

5 (後書き)

ようやくキラキラ少年の名前が登場。遅いよね・・・。

6 (前書き)

ご都合主義万歳・・・すみません。

そんなこんなで決戦。キラキラ少年との約束通り優勝、といくほど人生甘くない。

「・・・参りました」

「勝者、ラスト・スパイズ」

お互い武器を納め、一步引く。礼をして、会場をあとにする。

何を言っても負け犬の遠吠えだが、言わせてもらえばあれが騎士でない事がおかしい。

相手を威圧する気迫の眼差し。素人では絶対にありえないスキのない剣さばき。速さも力も、今までの相手の比じゃない。あれが騎士を目指す者の強さなら、騎士団は化け物の集まりに違いない！！

対峙した時点で分かった相手の強さ。圧倒的な力の差など、養い親と対峙すればいつも感じていた。それに近い感覚を、まさかここで味わう羽目になるとは思わなかった。

気迫でも負け、技量でも負け。そこで食らいつくほどの根性は私にはない。むしろ、賞金が確実にもらえるのならば、優勝などに興味はない。

賞金と少年との約束を天秤にかけ、あっさり前者をとった私は、さっさと降参宣言。もちろん、観客用に数回打ち合ってから。さすがに自分が地に伏すのは嫌だったので、打ち合いで力量の差を思い

知っての降参ということにした。一応私にもあるんです、プライドが。

そして迎えたのが、何故か現王宮騎士団団長レイ・グリンデル様が相手というスペシアルな試合。

「どうでしょう？上位三名全員と相手くださいませんか？」

さらに爆弾発言の優勝者。

いやいやこういうのは、優勝者対現騎士団長でしょ。そして、完膚無きまでに叩きのめし、圧倒的な力の差を見せつけ、優勝者の鼻っ柱をへし折るためのものにしようよ。

「いいですよ。私も、是非三人ともと手合わせしたいと思っておりましたから」

にっこり。

・・・・断ろうよ。

あっさり承諾。心の中でため息をつく私とは対照的に、3位をもち取っていたキラキラ少年は渋い顔。たぶん、3対1は卑怯だとか思ってるんだろう。まっすぐな少年だから。

「お二人とも、よろしいですか？」

「ええ、団長殿がそうおっしゃるなら」

「・・・・・・私も、異論はありません」

ほとんど傍観しますかね。

たっぷり時間をかけて答えた少年は、相変わらず渋い顔のままだ。
まあ、分からなくてもいいけどね。

もし、この後に起こることを知っていたのなら、あの腹黒騎士団長の手の平の上だと知っていたなら、絶対に、絶対に断っていたのに。このときの私は、これから起こることも、この先に降りかかる災難も、なにもかも、知るよしもなかったのだった――――――|。

6 (後書き)

ホントに、展開とかおかしいですよ。ついでに、ネガティブな後書きですみません。

7 (前書き)

主人公は、本気を出せば強い・・・予定。

そして始まった団長対上位3人の試合は、ほぼ優勝者対団長のものになっていた。

おかしい……。

肌を刺すような威圧感は、たんなる気迫なんてもんじゃない。明らかに相手に対して殺意を持っているものだ。

「……………っ!!」

そんな時だった、うっかり団長の背後に回りかけた瞬間、何かが飛んできて腕をかすめた。飛んできた方を見ても、観客が騒いでいるだけで何も見えない。

ちっ、そういう事ですか。

自分に当たったことで、軌道が変わったのか、団長には届いていないようだった。優勝者と入れ替わるように打ち込んでいった少年。鏑迫り合いをしている二人めがけて、また何かが飛んできた。

「団長、覚悟!!」

「!!」

少年のせいで動けない団長めがけて棍を振り下ろす。紙一重で避けたすれすれのところを棍が通り、何かを叩き落とすことに成功。

「セシルさん！！卑怯ですよ！！」

「黙れ！！現実を見ろ。君なら分かるだろ！！」

少年のまっすぐさが、今は煩わしいものでしかない。

どうやら飛んできたのは細い針のようなものらしい。もっとも、手のひらサイズの針を、裁縫に使うとは思えないので、おそらく暗殺者御用達の武器だろう。

なおも攻める優勝者、もとい共犯者。あの気迫は、絶対に優勝して、スペシャル試合で彼と戦い、彼を殺すことを依頼されたから。騎士に匹敵する強さを持つ意味も、これで納得できる。

でも、そうは問屋が卸さない。

「たあああああ！！」

声を上げて攻めれば、団長は紙一重で避けてくれる。そのギリギリのところで、針を落としていく。

少年もさすがに何かおかしいと思ったのか、周囲を見回し始めた。遅いつての！！

1本、2本、3本、いい加減にしろって！！

そろそろ私に妨害されていることに気づいたのだろう、共犯者が恐ろしい形相でこちらを睨んできた。いわく、邪魔するならお前も消す、と。

誰かの利益のために、他者の命を犠牲にするなど、あってはいけ

ない――――。

彼の死で、きっと多くの人たちが悲しみに沈む。家族が、友人が、恋人が、仲間が、悲しみを癒やすのにどれだけの時間を要し、癒える事のない人だっている。

それを、私は痛いほど良く知っているから――――。

けれど、さすが騎士団のトップ。3人がかりで攻めているのに、一筋も当たらない。それどころか、ほとんど剣で受け止めることもしない。暗殺者も中々よく見ていて、その数少ないせり合いの時を狙って針を飛ばしてくる。

ちっ、さすがに連戦は疲れるか。

重くなってきた体に、疲労を感じ始めた。これでは埒があかない。

暗殺者を、潰す……。

針さえなければ、あとは団長が勝手に共犯者を潰してくれるだろう。なんとなくだが、彼は何かを待っているような気がするのだ。

針が飛んでくるのは3方向から。王の見学席のある真下からと、左右から。王の席は一番高いところにあるから、真下は盲点だろう。他の騎士が気づきやすいのは、左右の観客席。とくれば、目指すは一点だ。

棍を二つに分ち、体を沈める。

一瞬で、決める。

「セシルさん!!」

少年の声を背に、地を蹴る。

自分めがけて迫る私に気づいたのか、数本飛んできた針を叩き落とす。鬼気迫る私の様子にパニックになった観客が逃げようと腰を浮かせる。

見つけた———。

その中に混じる一人の男。観客に紛れるその容姿、服装、一瞬で消えた殺意、どれをとってもかなりの腕の暗殺者だと分かる。けれど、決して観客にはあり得ないものが一つ。

「お前のだろう？これ？」

「!!」

一本だけ掴んでおいた針を投げれば、危なげなく受け取る男。その顔は、驚愕に満ちていた。

「……何故、分かった」

「足音、全然しなかったから」

おそらく癖なんだろう。足音をさせずに歩くことが。でもそれは、一般人ではあり得ない。

「一番始めに立ち上がり、逃げ出すよう群衆を煽ったのはいい考えだけど。その動作が、逆にお前がこの針の持ち主だと教えてくれたよ」

「・・・ふっ、殺すにはおいしい人材だな」
「ふふふっ。それは、お互い様」

既に観客席は混乱の渦。逃げ惑う群衆の中、対峙する。

そして――――。

「馬鹿が！！格好つけるのもいい加減にしろ！！」
「なっ！！」

「ダグランさん！！」

暗殺者の男めがけて振り下ろされた拳。信じられないとでもいうような表情のまま、気を失う男。それには目もくれず、ダグランが睨むのは私。えっ、なんで。

「馬鹿が！！暗殺者の毒針は常識だ！！」

さっきから体が重いのは、疲れじゃなくて・・・。

「あっ・・・」

しまった、と思った時は既に遅いものだ。揺らいだ視界と、体から抜ける力に、まるで一瞬時の流れが遅くなったように感じる。

「たくっ。あいつの過保護がうつちまった」

乱暴な言葉とは裏腹に、優しい腕が体に巻き付き、私は意識を失った――――。

7 (後書き)

ダグランさんは、戦って治せるお医者さんです。その理由は、明らかにされる・・・かも？

8 (前書き)

ようやく更新。とりあえず、亀更新でも更新をしていきたいと思
います。

猛烈な体のだるさを自覚しながら、ゆっくりと目を開けるとそこには――――。

「ソフィア？」

私のものより幾分か色の濃い灰色の瞳が、潤んでいた。波打つ漆黒の髪に、抜けるように白い肌。大きな瞳から、涙が零れぬのが不思議だ。

「つて、どうしたの？誰に泣かされた？ダグランさんに、セク・・・」
「馬鹿が！！お前に決まってるだろうが！！」

「いたっ！！ちょっと、私けが人でしょ？暴力はんた・・・」

「うるさい！！この間抜けが！！」

けが人を殴るなんて、医者としてどうかと思う。

痛む頭をさすりながら、記憶を遡る。

大会で準優勝したら、何故かスペシャル試合が残ってて、そこで団長を狙った凄腕の暗殺者を・・・。

「ああっ！！賞金もらってない！！」

「お前の心配はそこか！！」

当たり前だ。それが目的で大会に出場したのだから。

「・・・ん？」

すっかり涙が引っ込んだのか、今度は怖い顔になったソフィアがつんつんと私の肩をつつく。

体のだるさを隠すように、いつもどおり勢いよく起きれば、一瞬心配そうな表情をしつつも、やっぱり怖い顔のソフィアが私の手をとる。手を返し、私の手のひらに自分の指で文字を書いていく。

『心配した』

「ごめん。ちょっと油断した」

『怪我した』

「かすり傷だよ」

『毒があるって』

「それは、ダグランさんがなんとかしてくれたから、もう大丈夫！
！」

『・・・』

「いや、ホント。もう大丈夫だから」

『・・・』

「ホント、ごめんなさい。もう無茶はしません。ごめんって。もう怪我しないって。無茶もしないから」

『ヤマ・・・』

「ごめんなさい。すみません。それだけはやめて！！あの過保護親父に報告なんてしたら、あの暗殺者だけじゃなく、団長と少年まで殺される！！いや、大会を企画したやつが悪いとかいってこの国ごと滅ぼしかねないから！！」

「もうそのへんにしてやれ」

やれやれといった様子でダグランが割り込む。

「そもそも、あいつの説明不足が悪いんだよ。どうせ、『これは暗殺者が使う武器だから気をつけろ』ぐらいしか言わなかったんだろ？」

「まあ、そんな感じだったかな？」

「やっぱりな。あいつの中では暗殺者の武器に毒が塗ってあるのは常識なんだよ。だから説明しない。あいつのたちの悪いところはそういうところだ。自分の常識が世界の常識だと思ってやがる。全く、あれでよくお前らを育てられたぜ」

大げさに息を吐くダグランに、ソフィアと顔を見合わせて笑う。

場の空気が和んだところで、ドアをノックする音が響いた。

「誰だ？」

ダグランの問いに答えた人物に、思わず顔を顰めてしまったのは、当然のことだと思いたい。

「レイ・グリンデルです。セシル少年の具合を伺いに参りました」

どうする？とダグランが視線で問う。

団長自らが見舞いに来たというのに、それを断ったとなるという面倒なことになる。仕方がないと軽く肩を竦めれば、了解したというように、ダグランが軽く頷く。

「どうぞお入りください。ちょうど彼も目を覚ましたところです」

「では、失礼します」

そう言って、静かに室内に足を踏み入れた団長は、やはり騎士と言ふより文官のような風貌で、美貌が眩しく、笑顔が胡散臭かった。

「体の具合はどうですか？」

「もう随分と良くなりました。ご迷惑お掛けして申し訳ありません。」

「いえ、私の方こそご迷惑をお掛けして申し訳ない」

なら、今ここから早く立ち去ってくれないだろうか？愛想笑いで頬が痙攣しそうだ。

「おや、こちらの女性は？」

団長の言葉に、ソフィアがずっと一歩前に出る。

「私の妹でございます。名を、ソフィアと申します」

膝を折って礼をするソフィア。それに対し、貴族の姫君にするような仰々しい礼を返す団長。手の甲に口づけまでしそうになって、慌ててソフィアが手を引く。

「申し訳ありません。私も妹も、田舎の出ですので慣れておりませんで」

「いいえ、私こそ軽率でした。あまりにも美しい女性なので、つい。お許してください」

「やめてください。先に無礼な振る舞いしたのはこちらなのですから」

正直に言おう。こいつ、めんどくさい。

団長から身を引いたソフィアが、不安そうに私の肩に手を添えたので、そっと自分の手を重ねる。心配ない、と伝わるようにきゅつと握りしめる。

「で、何の用件なんだ？ 王国騎士団団長、レイ・グリンデル殿」

うわべだけの薄いやりとりでうんざりしたように、ダグランが直球をぶつける。仮にも、騎士団のトップにそんな口をきいていいのかと、こちらが不安になるほど直球勝負だ。

そんなダグランの言葉にも、気分を害した風もなく、団長が爆弾を投下してくれた。

「ふふふっ。用件は一つです。彼に、我が騎士団への入団していただきたく参りました」

だから、私の目的は賞金だって言ってるだろ！！

8 (後書き)

なんだか、会話とか説明ばかりの話になってしまった……。反省。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9458w/>

騎士になる？

2011年12月4日09時42分発行